第66号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：福田眞作副病院長）
〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2012年（平成24年）6月21日

病院長からの一言
－医学部附属病院長に就任して－

弘前大学医学部
附属病院長　藤　　哲

4月1日から弘前大学医学部附属病院長に就任し，2ヶ月が過ぎようとしております。病院長就任までは，10年間整形外科学講座を担当しておりました。岩手出身の私ですが，1969年弘前大学に入学後，既に43年間弘前を中心にして過ごしたことになります。附属病院勤務は，昭和56年から現在までの連続31年間になります。この31年間の附属病院勤務が，私の専門分野である整形外科，特に手外科・マクロサージャリーにおけるキャリアを育んでくれたものと信じています。私にとって，とても仕事のしやすい環境でした。前回の『南塘だより』65号の『先憂後楽』に福田眞作副病院長が私に贈ったエールに報いるように，職員の皆さんにとって働きやすい環境を提供できるよう努力するつもりです。

さて，弘前大学医学部附属病院の再開発事業はほぼ終了し病院外観は一新されました。本年はICU（集中治療室）8床から16床への増床のための整備・NICU（新生児集中治療室）・GCU（発育支援室）の充実に向けた整備を行う予定です。さらに病院経営においても，6年間にわたる花田前病院長並びに全職員の努力により多くの難題を解決し，健全に進められて来ました。しかし，本年は国の政策に伴い，7.8%の人件費削減の実施を余儀なくされ，このことが附属病院にも重くのし掛かってきました。震災復興のためということで，表立って異を唱えることができないところがありますが，国立大学附属病院長会議から『国立大学附属病院の高度先進医療・高難度医療の機能低下を防ぐために』と題して，給与削減とそれに伴う運営費交付金の減額についての再検討を要望書として提出しました。しかし，一旦出されたものを翻すことはまずないということも事実です。その他，附属病院が留意すべき大きな課題は，初期研修医・後期研修医の増加，地域連携の充実，先進医療の拡大などです。

今後は病院総職員の英知を結集し，新たな難題に取り組むべきであると考えています。皆さんのご理解・ご協力をお願い致します。

平成24年度新体制スタート！

平成24年4月から副病院長に消化器血液内科学講座　福田眞作教授，脳神経外科学講座　大熊洋揮教授が，病院長補佐に総合医学教育学講座　加藤博之教授，皮膚科学講座　澤村大輔教授，泌尿器科学講座　大山力教授，看護部　砂田弘子看護部長が就任しました。

副病院長
福田　眞作
消化器血液内科学講座
教 授

副病院長
大熊　洋揮
脳神経外科学講座
教 授

病院長補佐
加藤　博之
総合医学教育学講座
教 授

病院長補佐
澤村　大輔
皮膚科学講座
教 授

病院長補佐
大山　　力
泌尿器化学講座
教 授

病院長補佐
砂田　弘子
看護部長

各診療科の紹介
【医療支援センター】

医療支援センターは臨床検査技師にかかる業務を効率的に運営することを目的に平成18年4月に開設されました。検査部門，輸血部門，　病理部門の3部門よりなり，総勢36名(非常勤職員9名，パート職員2名含む）の臨床検査技師で検査業務を行っています。

【検査部門】

末梢血・血液凝固能，生化学，免疫・血清，尿などの体液，微生物，遺伝子，そして生理機能といった各種検査を行っています。また，外来患者の採血に関しては看護部の協力のもと中央採血室を運営しています。多い日で400名を超える患者さんの採血を行っており，年々増加傾向にあります。検査データに関しては外部精度管理事業に積極的に参加し，標準化され正確で精密な検査結果を診療科および患者さんへ提供できるよう日々努力しています。

【輸血部門】

輸血に関する検査のほか，輸血用血液製剤の発注・保管管理，払出しを行っています。更に貯血式自己血の採血，感染症検査と保管管理も担当しています。また，輸血認定医と認定輸血検査技師が専従しており地方中核病院の輸血部門として日本輸血・細胞治療学会認定医制度の指定施設・認定輸血検査技師制度の指定施設の認証を受けています。

▲センター長と検査部門

▲輸血部門

▲病理部門

【病理部門】

病理組織標本の作製を行う臨床検査技師と病理医から構成され，厳正な精度管理のもとに病理診断を行っています。また病理部は臨床医とともに病理組織を検討して，より正しい診断や適切な治療を探求する場でもあります。患者さんの治療にさらに役立つ病理診断を目指して，勉強会や臨床とのカンファレンスを常に積極的に行っています。

医療支援センターとしては，現在は上記3部門が独立して運営されている為，部門間の連携が必ずしも十分でないと感じています。たとえば若手技師の育成に関しても，他部門の業務も経験できるようにもっと流動的なローテーションを行えるようにすれば，広い視野を持った上で，専門的な技術を習得することが可能になると思われます。人材の育成を図りつつ，同時に臨床検査技師の業務を効率化し，更に充実を図るために，今後当院ではどのようにしていけばよいか検討を重ねてゆきたいと思います。

医療支援センター長　加藤博之
文責　臨床検査技師長　小島佳也

平成23年度ベスト研修医賞選考会開催

平成23年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が，平成24年2月22日18時より，医学部臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり，今回で8回目を迎えます。当日は，あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた，鴨井舞衣先生，中田有紀先生，根津仁子先生(いずれも二年次，五十音順）の3名の研修医が，「ここがポイント！　研修医の心がけ」と題し，自分が研修生活の中で重視してきた事柄について，一人10分間ずつスピーチを行いました。聴衆は学生および教職員で，スピーチのあと参加した学生諸君（特にこの1年間臨床実習で研修医に間近に接してきた5年生が中心）による投票が行われました。投票結果は，大変珍しいことに鴨井舞衣先生と根津仁子先生が全く同数の得票で，両先生が平成23年度ベスト研修医に選ばれました。引き続き表彰式が行われ，鴨井先生と根津先生に賞状，純銀製メダル，記念品が，中田先生には優秀研修医賞として賞状，楯，記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として，小林麻美先生に「ベストパートナー賞」，工藤周平先生に「レポート大賞」，豊岡広康先生に「セミナー賞」，藤田有紀先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会に移り，5年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われ，会場は大いに盛り上がりました。教職員も多数の参加があり，教職員，研修医，学生がみな，この1年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い盛会裏に終了しました。

医師は“人と人とのきずな”の中でしか育たないといえますが，本賞がこれからも，本学における人と人とのきずなを強固なものにするために貢献してゆくことを期待しています。

▲花田病院長，中路医学研究科長と共に，ベスト研修医賞の根津仁子先生(中央)と鴨井舞衣先生(同右)，優秀研修医賞の中田有紀先生(同左)。

（卒後臨床研修センター長　加藤博之）

先憂後楽

夢何処

副病院長　大熊　洋揮

数ヶ月前，NHKで就活問題を扱った特集番組をたまたま目にしました。一人の男子学生（大学4年生）の就活の様子を追い，厳しい現状をレポートしたものです。学生は既に40社以上の会社の就職試験に落ちています。学生がある会社の面接試験を受けている場面が映され，面接官曰く「将来の夢とか希望は何ですか？」。これに対し，学生「夢…ですか？ 就活で一杯だし…，夢は特に無いです」。これでは誰が面接官でも即刻落第にする筈です。「夢を持たない・持てない」若者達。

でも，同様のことが身辺でもよくあるような気がします。最近の医学部の入試面接で将来について尋ねても，ありふれた答えが返ってくるだけで，情熱に満ちた大志を語る受験生には遭遇できません。また，とある外科系の教室で，教授が教室員に将来の希望を聴取したところ，40才未満の教室員からは「専門医を取得したい」程度の希望しか出なかった，という話も聞いています。

医療従事者の職業選択が，単にリクルート的な志向に基づいているならば悲しい事態です。医療を志した時点から抱く，病気を治したい，患者の喜ぶ顔を見たい，という基本的な精神を，より大きな夢に変容させていくことが医療人としての必然ではないでしょうか。

しかし，社会または属する組織が夢を持たせてくれない，という論法もよく耳にします。夢とは社会や組織が与えるものなのでしょうか。過去の日本の歴史をみても，暗い時代の中でこそ先人は希望を胸に前進してきたように思えます。不自由のない安楽な生活が続くと，上昇志向が消失し，夢を持てなくなるとすれば皮肉なことです。

大学病院を含め医療の現場は，常に種々の問題に直面し，様々な変革を求められています。医療従事者に気の休まる時はありません。これらを乗り越えやすくするための環境作りは上層部の責務です。しかし，乗り越えるための真の原動力は個々の医療人の志だと思われます。医療とは，仕事の中に夢を抱くことのできる数少ない職種の一つだと思っています。

病棟のトイレ改修完了

弘前大学医学部附属病院では，この度，第１病棟及び第２病棟のトイレを和式から洋式に改修し，点滴台を持ったままスムーズに使えるトイレにリニューアルしました。

工事は３期に分けて行い，１期工事は第１病棟と第２病棟の工事着手前に共通トイレとして，病棟間にある食堂，面談室，搬送室を男子トイレ・女子トイレに改修し，職員トイレを多目的トイレに改修しました。１期工事は平成23年８月11日に着工，平成23年11月30日に完成し，各病棟の工事期間中はこちらを利用していただきました。

続いて２期工事として第１病棟のトイレを平成23年12月１日に着工し，平成24年２月10日に完成しました。最後に３期工事として第２病棟のトイレを平成24年２月11日に着工し，平成24年４月20日に完成しました。

工事内容として，トイレブースのドアは開きによる通行者への危険性や閉じ込めの心配のない外側折れ戸にすることにより，広い幅で入り口を開くことができ，点滴台を持ったままスムーズに入れるようになり，明るく清潔なトイレ空間としました。また，各トイレブースは患者さんが非常時に通報出来るようナースコールを設置しているほか，ドアのカギは緊急時に外部からも解放できるように統

一しています。

機械設備工事ではトイレ廻りの給水，排水管を全面更新したほか，病棟の給水機能が改善されるよう屋上受水槽から主幹となる縦系統の給水配管の入れ替えと各階の断水工事に対応出来るよう固くて開閉が出来なかったバルブを更新しました。

これらの病棟のトイレ整備により，今後使用される皆様には安全で快適な利用をして頂けるものと思います。

最後に，工事期間中は入院されている患者さんがいる中での工事で，騒音・振動・埃など患者様及び関係者の皆様にはたいへんご迷惑をおかけしましたが，ご理解とご協力頂き無事完成できましたことをこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

（施設環境部長　上野泰弘）

～花田勝美前医学部附属病院長が弘前大学名誉教授に～

花田勝美前医学部附属病院長が平成24年４月１日付けで弘前大学名誉教授の称号を授与されました。

「看護の日」に寄せて

今年も，「看護の日」“看護の心をみんなのこころに ” をメインテーマに５月６日～５月12日看護週間が開催されました。看護部では，毎年看護の日・看護週間記念行事として「看護の日のお花」を展示しています。今回は「和・モダン」をテーマに色鮮やかな花が装飾されたフラワーオブジェがエントランスに展示されました。さらに，フラワーオブジェ横のライトボックスには「メッセージカードあの瞬（とき）」として1997年 ～2012年までの懐かしい看護の日のメッセージカード16枚が展示されました。

来院された患者さんはもちろんのこと，臨床研究棟と外来診療棟正面西側を繋ぐ渡り廊下が完成したことで医療職員の方々にも一際目を引き看護の日のアピールができたと感じています。

また，今年度のメッセージカードは，看護職員からデザインを募集し“青い鳥とお花”のデザインが起用されました。５月11日に入院されている患者さん一人一人へ，看護師が心のこもったメッセージを記入してお渡しいたしました。患者さんは，思いがけないプレゼントに「ありがとう」「忙しいのに看護師さんからこんな素敵なメッセージをもらい嬉しい」「看護の日に入院できてラッキーです」と喜んでもらえました。また，看護師からは，患者さんに感謝され逆に励ましの言葉をいただいたことで，「頑張ろうと勇気をもらえた気がします」という声も聞かれました。これからも患者さんへ看護の心を届けるため，思いやりとやさしさを大切に，笑顔を忘れずスタッフ一同頑張ってまいります。

（第一病棟８階　垣内悦子）

看護実践活動報告会

看護実践活動報告会は看護実践の成果を共有し，看護の質の改善を図ることを目的に平成15年度から開催している。平成15年度は口演６題，ポスター１題の報告があり，その後も口演10題，ポスター５題前後の発表であった。平成20年度からは優れた看護活動に対して看護奨励賞を設け，平成21年度からはポスター報告とし20部署から22題，認定看護師から５題と応募が増加した。

職員が終日見られるようにポスター展示会場を設置し，優れたポスターや活動内容に職員投票を取り入れた。平成23年度はポスター展示期間中に入場者229名で118名が投票に参加した。

看護奨励賞は平成23年度までに部署17，委員会３，褥瘡対策室，個人12に授与された。また，ポスターは年々上達し，活動内容の充実と共に看護実践が可視化され，成果の共有に役立つと思っている。ポスター投票最多賞は周産母子センターが２年連続でとっており，次年度の看護奨励賞と共にポスター投票最多賞の獲得に向けての各部署の取り組みにも熱が入りそうである。

（第一病棟６階　増田育子）

○参考までに：各年度のテーマ

年　度	テ　ー　マ	応　募　数
平成15年度	広げようつなげよう看護実践の輪	口演６，ポスター１
平成17年度	看護実践の輪をつなぐネットワーク	口演７，ポスター６
平成18年度	看護にこころをみんなに届けよう	口演７，ポスター４，ミニミニナース劇団
平成19年度	看護にこだわる，看護を楽しむ	口演 10，ポスター２
平成20年度	看護に技・心をつなぐ ～もっと楽しく，もっと良い看護提供したい～	口演 10，ポスター５
平成21年度	見える看護を伝えたい	口演６，ポスター 22
平成22年度	もっと成果を伝えよう，看護の質は変わる	口演５，ポスター 24
平成23年度	実践の知・技・輪をつなげよう	口演６，ポスター 29

弘前大学看護職教育キャリア支援センターがキックオフ

看護部では，文部科学省　看護師の人材養成システムの確立＜看護職キャリアシステム構築プラン＞に応募した事業計画を進めるために，保健学研究科（看護学）と協同で「弘前大学看護職教育キャリア支援センター」設置に向けた準備をしてきました。平成24年３月５日に病院長ご参加の下，関係者によりキックオフすることができました。

センターでは，看護実践能力および教育力の育成･向上を目指し，Hirosaki Competent ナ ー ス（HiroCo ナース）育成プランを実施していきます。事業内容は保健学研究科と連携し，看護職の教育に関するプログラムの開発，指導者育成プログラムの開発，キャリアパス開発及びキャリアレコードの管理で，それぞれの部門を設けて活動していきます。

設置場所は外来診療棟地下１階で，教育担当看護師長と教育指導支援者が在室しています。臨床看護の基盤を作るため，看護学生から新人そして一人前の看護職員となるためのシームレスな教育システムを構築し，看護力を向上させて看護職としての専門性を発揮できる人材養成を目指していきたいと考えています。

（看護部）

ＣＴ機更新

この度，放射線部のCT機が更新されました。導入されたのは東芝社製160列（320列）の超多列，面検出器（Area Detector）CTです。4-5年前までは，CT機が，４列２台と１列１台の３台でたった９列と言う非常にお寒い状況だったのですが，急速に更新され，現在では64列が２台，320列が１台の計448列（！），そして高度救命救急センターには40列CTまで控えていると言う，超豪華なラインナップとなりました。これも一重に，病院の首脳陣や各診療分野を始めとする病院関係者のお陰と深く感謝しております。

さてこの度導入されたCT機ですが，320列の面検出器を生かし，16cmの範囲を１回転，0.35秒で撮像する事が出来ると言う，世界にも類を見ない優れた性能を有しています。通常のCT機では，１回転の撮像範囲が高々3-4cmのため，時間がかかった訳ですが，このCTでは高い時間分解能を得る事が出来ます。従って，このCTは循環器系や中枢神経系，肝臓などの血管系の描出，循環動態の把握，運動状態の描出等に大きな威力を発揮します。また，160列の超高速ヘリカルスキャンで広範囲の検査も非常に迅速のため，全身の検査が必要な緊急時のCTや呼吸状態の悪い症例，小児などの静止が困難な症例の検査にも有力な手段となります。更に，管電圧を急速に変えてスキャンを行う事で物質の弁別や造影剤分布などを画像化できるDual-energy CTも可能です。

このような優れたCT機が導入されて，放射線科画像診断部門は，院内の御要望にお応えできるよう，より一層はりきっておりますので，更なる御指導，御鞭撻の程，宜しく御願い申し上げます。

（文責：放射線科 小野）

【 編集後記 】

南塘だより第66号をお届けします。冬の陣の降雪が多かったことが影響したのか，今年の春は，なかなか暖かくなりませんでしたが，さすがに「弘前さくらまつり」開催時には気温が上がって暖かくなり，弘前城の桜が満開になりました。しかし，連休後半の雨は，残念でした。

さて，前花田病院長（名誉教授）におかれましては，平成24年３月までの６年間，病院長として大変お疲れ様でした。青森中央学院大学長として，本県の高等教育の発展に御活躍を祈念いたします。後任病院長として，藤病院長補佐が４月に就任されました。新たな体制のもと，本院のCEOとして，本県の医療の向上，研修生の確保などにその手腕が期待されております。

（総務課長）